はじめに

芭蕉の文学が西行の文学に深いかかわりを持っているのは周知の事実である。寛文年間の読み戦略の発刊以来、貞享年間の作品をピックとして、すでに定説となっているものの挙げても、枚挙にいとまがない。しかし、その表面に表われる西行とのかかわりは、近年に至り次第に減少しているところから、西行の影響から脱却してかえるのみの追求に力を注ぐことになったと考えられ勝ちであった。

しかし、近年は、芭蕉の時代に西行の作と信じられていた「集抄」を「おくのほそ道」とのかかわりの深さを示すことができた。なに、芭蕉の西行作品のうちで、中国や日本の古典文学と芭蕉とのかかわりについて『芭蕉の芸術その展開と背景』（有精堂 昭和43年6月）の「おくのほそ道」は、前に述べたように、芭蕉と西行関係文学と芭蕉とのかかわりの深いところを考察することがによって、芭蕉が「おくのほそ道」をいかなる考えから書き上げたのかを追ってみたと思われる。

特に『源氏物語』とのかかわりが非常に深いことはよく知られて
おおくのほそ道で、「古今至高の文学者となりやすい縁合」とは多くの人々の言語で、ここで行いされている点について、広田氏は「芭蕉と古典、元禄時代、第六章、おおくのほそ道」と古いのを指摘している。

次のように指摘している。（P.70）

おおくのほそ道において、多くの古典、かかわりの中で、西行とのそれは最も重要な意味を持っている。旅立ちの旅で、新たな地に旅立つ西行が芭蕉の心を自らの旅心として、西行のたどりたなる歌枕を中心とする旅心を自らの旅心とし、西行の歌枕を絵めぐる旅の記を創り出すという方向性を持つ旅を指摘する。

西行の『指南』の「みちのく運乗」（123、129朝日古典全書の通り・番号による）は、『葛飾』の「みちのくの旅」を、いわば象徴するものである。西行の旅心を越えていこうと、その旅の旅心に、かかわりのある松島の月が「心をくらませ」たという表現を示したものとする。この旅心を、西行の旅心を呼び寄せていていることを示したものは、かかわりのない松島の月が、西行の旅心を呼び寄せていていることを示したわけではない。

このように、西行の旅心を呼び寄せていていることを示したものは、かかわりのない松島の月が、西行の旅心を呼び寄せていていることを示したものではない。このように、西行の旅心を呼び寄せていていることを示したものは、かかわりのない松島の月が、西行の旅心を呼び寄せていないことを示したものではない。このように、西行の旅心を呼び寄せていていることを示したものは、かかわりのない松島の月が、西行の旅心を呼び寄せていないことを示したものではない。このように、西行の旅心を呼び寄せていないことを示したものではない。このように、西行の旅心を呼び寄せていないことを示したものではない。このように、西行の旅心を呼び寄せていないことを示したものは、かかわりのない松島の月が、西行の旅心を呼び寄せていないことを示したものではない。このように、西行の旅心を呼び寄せていないことを示したものは、かかわりのない松島の月が、西行の旅心を呼び寄せていないことを示したものではない。このように、西行の旅心を呼び寄せていないことを示したものは、かかわりのない松島の月が、西行の旅心を呼び寄せていないことを示したものではない。このように、西行の旅心を呼び寄せていないことを示したものは、かかわりのない松島の月が、西行の旅心を呼び寄せていないことを示したものではない。このように、西行の旅心を呼び寄せていないことを示したものは、かかわりのない松島の月が、西行の旅心を呼び寄せていないことを示したものではない。このように、西行の旅心を呼び寄せていないことを示したものは、かかわりのない松島の月が、西行の旅心を呼び寄せていないことを示したものではない。このように、西行の旅心を呼び寄せていないことを示したものは、かかわりのない松島の月が、西行の旅心を呼び寄せていないことを示したものではない。このように、西行の旅心を呼び寄せていないことを示したものは、かかわりのない松島の月が、西行の旅心を呼び寄せていないことを示したものではない。このように、西行の旅心を呼び寄せていないことを示したものは、かかわりのない松島の月が、西行の旅心を呼び寄せていないことを示したものではない。このように、西行の旅心を呼び寄せていないことを示したものは、かかわりのない松島の月が、西行の旅心を呼び寄せていないことを示したものではない。このように、西行の旅心を呼び寄せていないことを示したものは、かかわりのない松島の月が、西行の旅心を呼び寄せていないことを示したものではない。このように、西行の旅心を呼び寄せていないことを示したものは、かかわりのない松島の月が、西行の旅心を呼び寄せていないことを示したものではない。このように、西行の旅心を呼び寄せていないことを示したものは、かかわりのない松島の月が、西行の旅心を呼び寄せていないことを示したものではない。このように、西行の旅心を呼び寄せていないことを示したものは、かかわりのない松島の月が、西行の旅心を呼び寄せていないことを示したものではない。このように、西行の旅心を呼び寄せていないことを示したものは、かかわりのない松島の月が、西行の旅心を呼び寄せていないことを示したものではない。このように、西行の旅心を呼び寄せていないことを示したものは、かかわりのない松島の月が、西行の旅心を呼び寄せていないことを示したものではない。このように、西行の旅心を呼び寄せていないことを示したものは、かかわりのない松島の月が、西行の旅心を呼び寄せていないことを示したものではない。このように、西行の旅心を呼び寄せていないことを示したものは、かかわりのない松島の月が、西行の旅心を呼び寄せていないことを示したものではない。このように、西行の旅心を呼び寄せていないことを示したものは、かかわりのない松島の月が、西行の旅心を呼び寄せていないことを示したものではない。このように、西行の旅心を呼び寄せていないことを示したものです。
共に心をゆるがせる存在であったこと。やはり深い意味を読み取るためにはならないと思う。西行が誇るまに、奥羽北陸への旅行は、旅立とうとしていると表現することができて、本紀行が詩行の旅深いかわかりあるものであることをひまわりしているとみてよいのではないだろうか。

次に、序章の末尾に位置する巻頭第一句、草の戸も住者の代ぎのな家についてであるが、この句は巻末の蛤のふたみにわかれる秋月、と首尾照応しているとは、富山松江の所説である。そうするとなにかと。

┼ מיון백 희안철하는 것은、富山松江の所説である。こうすると航するために、住者の代ぎのな家と首尾照応しているものは、富山松江の所説である。こうすると航するために、住者の代ぎのな家と首尾照応しているものは、富山松江の所説である。こうすると航するために、住者の代ぎのな家と首尾照応しているものは、富山松江の所説である。こうすると航するために、住者の代ぎのな家と首尾照応しているものは、富山松江の所説である。こうすると航するために、住者の代ぎのな家と首尾照応しているものは、富山松江の所説である。こうすると航するために、住者の代ぎのな家と首尾照応しているものは、富山松江の所説である。こうすると航するために、住者の代ぎのな家と首尾照応しているものは、富山松江の所説である。こうすると航するために、住者の代ぎのな家と首尾照応しているものは、富山松江の所説である。こうすると航するために、住者の代ぎのな家と首尾照応しているものは、富山松江の所説である。こうすると航するために、住者の代ぎのな家と首尾照応しているものは、富山松江の所説である。こうすると航するために、住者の代ぎのな家と首尾照応しているものは、富山松江の所説である。こうすると航するために、住者の代ぎのな家と首尾照応しているものは、富山松江の所説である。こうすると航するために、住者の代ぎのな家と首尾照応しているものは、富山松江の所説である。こうすると航するために、住者の代ぎのな家と首尾照応しているものは、富山松江の所説である。こうすると航するために、住者の代ぎのな家と首尾照応しているものは、富山松江の所説である。こうすると航するために、住者の代ぎのな家と首尾照応しているものは、富山松江の所説である。こうすると航するために、住者の代ぎのな家と首尾照応しているものは、富山松江の所説である。こうすると航するために、住者の代ぎのな家と首尾照応しているものは、富山松江の所説である。こうすると航するために、住者の代ぎのな家と首尾照応しているものは、富山松江の所説である。こうすると航するために、住者の代ぎのな家と首尾照応しているものは、富山松江の所説である。こうすると航するために、住者の代ぎのな家と首尾照応しているものは、富山松江の所説である。こうすると航するために、住者の代ぎのな家と首尾照応しているものは、富山松江の所説である。こうすると航するために、住者の代ぎのな家と首尾照応しているものは、富山松江の所説である。こうすると航ために

途中の出来事は山本の巻頭第一句、草の戸も住者の代ぎのな家を示すところがあると言わざるを得ない。

西行の句も西行とのかわりを示すところがあるとよいと思われる。西行には常日頃の訪れに出家を隠しにいくという、西行が隠カフと行出して世話になるという、芭蕉は「なばな屋」、というようなこと。

このときにはめたのではなかったろうか。芭蕉は「なばな屋」、「はなのはなし」、というようなこと。

西行は自らもとどりを切って出家を隠しに行くという。この有名な西行と出家と出世話の意識をいうには、芭蕉は「なばな屋」、「はなのはなし」、というようなこと。

西行は自らもとどりを切って出家を隠しに行くという。この有名な西行と出家と出世話の意識をいうには、芭蕉は「なばな屋」、「はなのはなし」、というようなこと。

久しの出来事は山本の巻頭第一句、草の戸も住者の代ぎのな家を示すところがあると言わざるを得ない。

西行の句も西行とのかわりを示すところがあるとよいと思われる。西行には常日頃の訪れに出家を隠しにいくという、芭蕉は「なばな屋」、「はなのはなし」、というようなこと。

西行は自らもとどりを切って出家を隠しに行くという。この有名な西行と出家と出世話の意識をいうには、芭蕉は「なばな屋」、「はなのはなし」、というようなこと。

久しの出来事は山本の巻頭第一句、草の戸も住者の代ぎのな家を示すところがあると言わざるを得ない。

西行の句も西行とのかわりを示すところがあるとよいと思われる。西行には常日頃の訪れに出家を隠しにいくという、芭蕉は「なばな屋」、「はなのはなし」、というようなこと。

西行は自らもとどりを切って出家を隠しに行くという。この有名な西行と出家と出世話の意識をいうには、芭蕉は「なばな屋」、「はなのはなし」、というようなこと。

久しの出来事は山本の巻頭第一句、草の戸も住者の代ぎのな家を示すところがあると言わざるを得ない。

西行の句も西行とのかわりを示すところがあるとよいと思われる。西行には常日頃の訪れに出家を隠しにいくという、芭蕉は「なばな屋」、「はなのはなし」、というようなこと。

西行は自らもとどりを切って出家を隠しに行くという。この有名な西行と出家と出世話の意識をいうには、芭蕉は「なばな屋」、「はなのはなし」、というようなこと。
このように、序章の多くの西行思想をしのばせ、西行を充分読むことは無理である。芭蕉が声高に西行、西行と思慕を表明した時期はもう終わったのである。常に表現の新しいを求めた芭蕉は、西行の文学を様々な所で打返し、仏教文学としての表現に工夫を凝らした。みつてよいだけであるが、一方で、西行を意識して読んでも、その文学性に一段と陰影を添えるということになるだろう。

序章に続く旅立ちの章以下、大観に至るまで、西行関係文学のなかかりは非常に多く、それらは全編にわたって極めて重く配置されている。先述の廣田氏の論文にも古注の要か、全編にわたって適当な位置に配置されている。くわえて、この章、二の考察を加えてみたいと思う。

しかし、全編のクライマックスはある松島から平泉に至る数章ほど、芭蕉が最も力を注いでいる。諸家の見解をよくてか、二の十四章から二十七章に当る、文字通りの中心部分である。
松島・瑞巌寺については、『おくのほどの道』執筆以前に書かれたとも思われる仏教が三編残されている。そのうち、『風俗文選』と『松島・瑞巌寺』の章がほぼ出来上るものである。ところが、仏教に書かれていないが、記行本文にはあるというのがこの箇所である。

1. 松の木陰に世を去るふ人節
2. 萬良の発句と友人・門人等から贈られた松島の詩や歌句がある
3. 萬良に詠んだ芭蕉の発句
4. 萬良の『隨行日記』・『北畠庵』・『道心者住ズ』と簡

次に、2の実際には自作の句がありながら曾良の句のみを本文にせた上、友人・門人の作品に敬意を表する旨の記述がある。芭蕉のこれまでの記行作品の常套手段であった。高名な歌枕で自己の作品を作らないという書き方から『記行の式』をなさったものをそのまま」という、井上敏幸氏の指摘があり、芭蕉は形式的にも完璧を

さらに、3見仏聖の想いは、松島・瑞巌寺の章の最後に置かれた情意をはめるための布石と思われるので、芭蕉は形式的にも完璧を期して『おくのほどの道』書き上げようとは努めていたことが窺え

2日、平和泉へ心身を

一方、次の平泉の章へつながら書き方

芭蕉の西行思想をはめたところと共に、次の平泉の章も西行と

芭蕉の西行思想をはめたところと共に、次の平泉の章も西行と

この如く、仏教と記述の違いは、西行とはながるものか、若

は、記行文を完璧なとしているための配慮か、いずれかであった

『おくのほどの道』書き上げた芭蕉の意図を読むこと

し、西行との漸次で
三

序章とクライマックスが、西行との深いつながりを内に秘めたものと理解できる。西行の生誕と死を結ぶ一連の事件は、西行の文学的表現を深く影響している。西行は、終章においてこのつながりを強調し、自身の創作物語をさらに深めるために努力した。

特に注目すべきは、西行の作品に普遍的なテーマが含まれていることである。西行は、人生の喜びと苦しみ、愛と孤独、そして物想いをテーマにした詩を多く残している。これらの作品は、西行の人生観と世界観を象徴し、後世に多くの影響を及ぼしている。

西行の作品は、時に苦しみ、時に喜びを象徴する美しい自然景色が描かれている。西行は、自らの思いを自然の美しさに託し、詩を通じて表現した。その詩は、人々に深く心を触れており、現代でも多くの読者に愛される。

西行の生涯は、詩を通じて人生の喜びと苦しみをテーマとし、未来への希望を歌い上げるものであった。西行は、日々の生活から得た感想や感情を詩に形づくったことで、時を超えて多くの人々に深く心を触れ、愛される詩人としての存在を果たしてきた。
のは、なぜ門人に見せたり出版したりしようとはしなかったのか、
なぜ大坂携帯せずに兄に預けたのかの二点である。芭蕉は秋羽
北陸行の帰途、二年もの間縄内を漂泊し、旅の成果を
説いて再読した。従って、「おこのはは道」を切て読んだがってい
たのは、上方の門人たちであったろう。しかし、それはあたかも
門人たちの目に触れないようにと配慮の知く、伊賀の奥隠に預
けた彼の旅の姿や旅の本意・本情を記したのであれば、さっそく門人
に示し、出板の手数を整えるのが普通であろう。また、自らの
経典とするのであれば、兄に預けずに大坂へ携帯して行く方が
考えならや大坂へ行った。その旅先から兄へ宛てて、次の様々な
書簡を送っている。日付は九月二十三日である。

（前略）いたせ、遠留ししてな、手紙へ、長遠途を無蠱の様に
奉候（候）に、二三日中、はせ、名前越御座布司へ、参上可申と奉差
候。相管無事御座候。為、御教内、如何御座候。

芭蕉の伊勢参詣計画は、六月廿四日付の大坂宛書簡は、以
て決まっている。今後、伊勢への渡航は決まったと言える。
此句は、（中略）それに、此秋はいかなる寸口の腸をさらげるにや。（中略）されば此秋はいかなる事の心に叶はずるかなあらん。伊賀を出て後は心境すゆやかなならず，明幕になやみな申されし，京都天宮の間を経て伊勢路にやおるむべき，それも人々のふしがりてこそなに，わたりなき心でもいいぬべし，とくぞしてちからきなば，ひたふるの長谷起すべきたや，しのびる時はふくめられ待リしに，唯羽をのみかいつくいて，音もなくなり給へるぞや，しこれ事は俺たなは。右によると，この句を詠んだのは大へんな身体の不調に悩まされ，彼の心ももどりをたてて，かすれていた折であった。恐らく死期もそれ程遠くないと言ったのではないだろうか。動ける間何としても伊勢行きたい旨を伝えて，その方取りを支考に密命していたようである。伊勢神宮へ去り，何のために行くのか，支考にも話していないようだが，芭蕉はもともと心に秘める事の多い人である。春日尼の事はそうであるし，その子どもたちについても具体的には何ももらいていない。江戸で立ち寄るまでの間，一体どこで何をしていったかも口外していな

さて，この発句であるが，死がほど遠くないと悟ったであろう。芭蕉は，有名なあの西行歌を思い起こし，それに酬和すべきもの，多分に悲哀に満ちていたであろう。